

文庫めぐり

(25)

陽明文庫

旧五撰家の筆頭で藤原北家の嫡流であった近衛家は、歴代撰政、関白の要職にあり、藤原道長、藤原頼通をはじめとして多くの傑出した人物を輩出している。歴代の近衛家伝来の膨大な記録・文書・学術芸面の史料は、幸いにも応仁の乱にも疎開によって罹災焼亡を免れ、以後その保存管理が近衛家によって成されてきた。

明治維新後大正の一時期、京都大学附属図書館に寄託されるなど、幾多の変遷を経て昭和十三年(一九三八)陽明文庫が設立され、永久保存の体制がとられた。京都大学の寄託が解除された時、近衛家から附属図書館に対し寄託した典籍の保管の感謝の証として、典籍二百十九部、三千五百冊が寄贈され、近衛文庫として今日保存されている。蔵書には漢籍を多く取め、国書写本『宇津保物語』『落窪物語』『人鏡』などが含まれている。

他方、今回ご紹介する『陽明文庫』には、総点数二拾万点を超え、国宝八、重文五十二を蔵する。中でも道長による『御堂関白記』をはじめ、近衛家歴代の日記や文書記録、文永四年(一二六七)近衛基平書写の奥書を持つ古写本二十二冊の『殿曆近衛文磨侯』関係文書など、数えあげればきりが無い。筆者は医史学に興味を持ち始めた昭和六十一

年十一月、当時の京都医学史前研究会会長故守屋正、宗田一両先生をはじめ杉立義一、高島文一ら諸先生方の中へ参加させていただき、京都市右京区宇多野上ノ谷町一―二にある鉄筋コンクリート二階建ての『陽明文庫』を訪れたことを思い出す。同文庫は近衛家が陽明門の東にあつたため、陽明文庫と称されたことなど、種々の説明の後に書庫に入つた。膨大な史料が整然と置かれ、重要書類は桐箱に保存され、さらに書庫の壁面四方すべてが厚い桐の板で覆われ、まるで書庫全体が桐箱となつているのを見て、我が家の書庫の貧弱さと比較し恐れ入つた記憶がある。

当時はまだ医史学に対して勉強不足で、どのような史料が蔵されているのかも知らずじまいで、ただ大先輩の諸先生方後についていた会話の中で、医学に関する典籍は極めて少ないとの話をされていた記憶しかない。その後、眼科史をひもときながら、中世の目医師の生業を調査するための日記類、史料が随分多く蔵されていることに気付き、ぜひもう一度訪れたいと思つている。入館はかなり厳格で、基本的に閲覧は研究者のみとされる。ただし学生・院生は指導教官の紹介状を必要とする。なお、同文庫には、江戸中期の近衛家熙(一六六七―一七三六)の著した優れた本草図『花木真写』も残されている。

(奥沢 康正)